

The Japanese Association for Metastasis Research

NEWSLETTER Vol. 49

- 第26回 学術集会のご案内
第27回 学術集会のご案内
寄稿 高後 裕 名誉会員 (第18回会長)
國安 弘基 新理事
(奈良県立医科大学分子病理学講座)
西岡 安彦 新理事
(徳島大学大学院医歯薬学研究部)
伊藤和幸前事務局幹事(野崎徳洲会病院)
- 第22回 研究奨励賞募集案内
会則/役員選任規程/役員名簿/変更届



日本がん転移学会

URL : <http://jamr.umin.ac.jp>

第26回日本がん転移学会学術集会/総会の案内

- 会 期 : 平成29年(2017年) 7月27日(木) ~28日(金)
- 会 場 : 大阪国際会議場(グランキューブ大阪)
- テーマ : “微小転移の制御によるがんの根治を目指して”
“Eradication of Micrometastasis for Cancer Cure”

おもなプログラム

* 招待講演 : Prof. Klaus Pantel
(Department of Tumor Biology, University Medical Center Hamburg-Eppendorf)

* シンポジウム

- (1) がん微小転移の新たなる臨床における診断法と治療
- (2) がん幹細胞に対する新たなる知見
- (3) がん微小環境における免疫細胞の誘導と制御

◆会議予定◆

理 事 会	7月26日(水)	16:45~17:45	大阪国際会議場
評議員会	7月27日(木)	12:10~13:10	11F 会議室 1101・1102
総 会	7月27日(木)	13:20~13:40	12F 特別会議場

【第26回学術集会/総会事務局】

大阪大学大学院医学系研究科 外科学講座 消化器外科 (担当: 高橋 剛)

〒565-0871 吹田市山田丘2-2 E2

Tel:06-6879-3251 06-6879-3259

運営事務局: 株式会社メッド

〒530-0012 大阪市北区芝田2-5-14 TEL:06-4802-6661 FAX:06-4802-6662

ホームページ <http://www.jamr2017.org/>

E-mail: jamr2017@med-gakkai.org

第27回日本がん転移学会学術集会・総会の案内

- 会 長 : 越川 直彦 (神奈川県立がんセンター臨床研究所)
- 会 期 : 平成30年(2018年) 7月19日(木) ~20日(金)
- 会 場 : ホテル メルパルク横浜
- テーマ : がん転移制圧にむけた異分野融合による技術革新

第26回日本がん転移学会学術集会・総会 7月27日(木) 日程表案

	第1会場	第2会場	ポスター会場	評議員会
	12F 特別会議場	12F 会議室1202	12F 特別会議場ロビー	11F 会議室 1101・1102
8:30	開会の挨拶		ポスター掲示 8:30-12:00	
8:40	シンポジウム1 がん微小転移の新たなる 臨床における診断法と治療	ワークショップ1 転移と細胞特性(幹細胞)1 座長:石井 秀始 藤田 直也		
8:48		ワークショップ2 転移と微小環境1 座長:横崎 宏 猪原 秀典		
10:00	座長:夏越 祥次 安井 弥			
11:00	招請講演 講師:Klaus Pantel 座長:伊藤 和幸			
12:00				
12:10	ランチョンセミナー1 共催:日本イーライリリー 座長:野田 哲生 演者:掛地 吉弘	ランチョンセミナー2 共催:大塚製薬工場 座長:宮園 浩平 演者:宮田 博志	ポスター閲覧 12:00-17:40 ポスター1 EMT・がん幹細胞 ポスター2 転移の分子基盤1	評議員会 12:10-13:10
13:00			ポスター3 転移と微小環境1 ポスター4 転移に対する新規治療 ポスター5 転移と細胞動態	
13:10			ポスター6 臨床(大腸) ポスター7 臨床(食道・胃) ポスター8 転移の実験モデル	
13:20	総会			
13:40	特別講演 講師:吉森 保 座長:土岐 祐一郎			
14:40	シンポジウム2 がん幹細胞に対する 新たなる知見	ワークショップ3 転移と細胞動態 座長:藤原 俊義 伊東 文生		
15:40	座長:森 正樹 濱田 淳一	ワークショップ4 転移の分子基盤 座長:三森 功士 太田 哲生		
16:40				
16:50	イブニングセミナー1 共催:中外製薬 座長:北川 雄光 演者:高倉 伸幸	イブニングセミナー2 共催:アストラゼネカ/ 第一三共 座長:夏越 祥次 演者:竹内 利寿		
17:40			ポスター発表 17:40-18:40	
18:40				
19:00	会員懇親会(リーガロイヤルホテル大阪 2F 桐の間)			
21:00	19:00-21:00			

第26回日本がん転移学会学術集会・総会 7月28日(金) 日程表案

	第1会場	第2会場	ポスター会場
	12F 特別会議場	12F 会議室1202	12F 特別会議場ロビー
8:15	モーニングセミナー1 共催:小野薬品工業 座長:森 正樹 演者:北野 滋久	モーニングセミナー2 共催:ミヤリサン製薬 座長:渡邊 昌彦 演者:水島 恒和	ポスター掲示 8:15-10:15
9:05			
9:15	シンポジウム3 がん微小環境における 免疫細胞の誘導と制御 座長:越川 直彦 海野 倫明	ワークショップ6 転移と細胞特性(幹細胞)2 座長:國安 弘基 西岡 安彦	
10:15		ワークショップ7 転移診断 座長:渡邊 昌彦 馬場 秀夫	ポスター閲覧 10:15-13:10 ポスター9 転移と微小環境2
11:15	会長講演 座長:門田 守人		ポスター10 臨床(肉腫・その他)
11:45			ポスター11 新規診断法
12:00	ランチョンセミナー3 共催:大鵬薬品工業 座長:清水 英治 演者:石井 秀始	ランチョンセミナー4 共催:SBIファーマ(株) 座長:中釜 斉 演者:井上 啓史 高橋 剛	ポスター12 薬剤・放射線耐性 ポスター13 転移に対する治療(肝胆膵) ポスター14 予後マーカー
12:50			ポスター15 転移の分子基盤2 ポスター発表 13:10-14:10
13:10			
14:10			
14:20	教育講演 講師:山本 浩文 座長:松浦 成昭	ワークショップ8 転移治療 座長:永野 浩昭 矢野 聖二	
15:20	ワークショップ5 転移の実験モデル 座長:井上 正宏 大島 正伸	ワークショップ9 転移と微小環境2 座長:川田 学 二口 充	
16:20	閉会の辞		
16:30			

寄稿 1 : 近況報告と雑感

高後 裕 名誉会員 (国際医療福祉大学)

札幌医科大学、旭川医科大学の勤務を終え、ここ国際医療福祉大学へ赴任して2年が過ぎ、ようやく那須での新しい生活にも慣れてきました。国際特区として成田市に国際医療福祉大学医学部が平成29年4月1日に開校しました。アジアからの留学生20名を含めて1期生140名が入学、英語での講義の実施など、新たな試みが導入され、医学教育自身のグローバル化が具体的に始まると思われ、彼らがどのように育っていくのか見守っていくのが楽しみです。

平成21年7月23、24日に旭川で「がん転移研究のブレークスルーを目指して」というテーマで第18回総会を開催させていただき、その際に、若手研究者の活性化と国際化を念頭にプログラムを作成してから、すでに8年が経過しています。卒業して札幌医科大学癌研内科に入局、がんの内科臨床と基礎研究を始めてから、四半世紀が過ぎ、この間の癌に対する考え方、診断・治療法の進歩と変化には、驚嘆せざるを得ません。「がん」と言われた時点で、不治の病で生命予後が数か月となった頃と現在を較べると、全体には大きな進歩がみられています。しかし、未だに罹患率と死亡率がほぼ同じ難治性がんがいまだに存在する事実や、治癒した10年以上後に転移性がんで見つかる例に実際に直面すると、がん転移機構の解明やその制御がいかにか難しいか、転移研究の更なる進歩が必要な事を、改めて実感させられるこの頃です。とくに、分子標的治療薬の進歩が著しく、さらに免疫療法がpromisingな方法として確立されてきており、いよいよ、腫瘍細胞と微小環境、骨髄・免疫環境が複雑に絡むがんの転移が制御され「転移を制するものは癌を制する」という当初からの考え方が、ようやく実現するのではないかと思います。

私自身と転移研究のはじまりは、札幌医科大学癌研内科で、新津洋司郎名誉教授(当時助教授)のもとで、プロスタグランジンによる転移抑制の動物実験をお手伝いしていた時に始まります。転移モデルとしては、Lewis肺がん細胞を、ブラックマウスの尾静脈より注射し、各種合成プロスタグランジンの転移抑制効果を、肺の転移数を目視でカウントしてみるというもので、当時のことが、懐かしく思い出されます。その後は、鉄過剰による発がん、浸潤、転移促進に一貫して興味をもってきました。このカスケードの最終ターゲットは、ROSの産生に行きつき、活性酸素種としては、スーパーオキシドとヒドロキシラジカルであり、とくに後者は、いまだに容易に除去できないため、根本の鉄イオンを遮断する方策を考えてきました。逆に言えば、スーパーオキシドをターゲットとした抗酸化療法や食品では、ラジカル除去は解決できないこととなり、巷の抗酸化療法の限界を示しています。丁度、鉄イオンの中でも、生体に毒性を発揮するのは、不安定なフリーの鉄であり、最終的なラジカル産生や鉄の細胞内への取り込みもその形であること、それを制御してみるという仮説を立て、不安定な鉄(non-transferrin bound iron, NTBI)の超微量測定系を開発する一方で、この不安定鉄をトラップする方策としてこれまでの鉄キレート療法に加えて、体外循環カラムによる不安定鉄の補足法ができるのではないかと、その試作等にも取り組んできました。正直、道半ばというところですが、何とか方向を見定めたいと思っています。

ところで、学術論文の寿命は約30年と言われ、一人の研究者の研究寿命とも匹敵し、よほどの優れた成果以外は忘却の彼方におかれ、その後の研究者はそれらの成果や経験を引き継ぐことなく、かつ先人の成果を知ることなしに、また繰り替えされるといふ笑えない話があります。しかし、情報科学の進歩により、かつての著書や論文もアーカイブ化されたり、図書館に所蔵された時点でマイクロフィルム化されてよみがえり、100年前の原文も容易に振り返ることができるようになってきています。確かに、現在の研究と比較すると、immatureですが、事象としては捉えられているものも多く、その説明や解析が、EMT、幹細胞、網羅的遺伝子解析、シングルセルなど手法がより詳細になってきている現在、一層、研究の生データのストレージと共有が必要であり、仮説をもととした実験医学における再現性を担保する上で極めて重要なことだと思います。さらに、研究再現性の担保、重複研究の回避、新しい仮説の構築などの目的

に「データシェアリング」のインセンティブを高めるための「データ オーサーシップ」が提唱され (New Engl J Med, March 2017)、研究データは共通の財産となり、より客観的に担保、共有利用されていく時代に、急速になる方向に動いています。がん転移の研究・開発においても、そのプライマリーのデータを共有することで、より迅速に信頼性の高い診断・治療方策が立てられていくものと期待しています。

寄稿2：大きな絵

國安 弘基 新理事 (奈良県立医科大学分子病理学講座)

平成28年から、理事を務めさせていただいております奈良県立医科大学分子病理の國安弘基と申します。

癌転移の研究に取り組んで、いつの間にか20年が経ってしまいました。いろんな分子を追いかけたり、がん幹細胞と言われればそれをやり、EMTと聞かされればそれを試すような「出物まかせ」の類を続けていましたが、納得のいく仕事はなかなかできずにいました。奈良で自分のラボを持ってからは、徐々に宿主と癌細胞の代謝に興味が収斂して来ました。

わたしは、昭和61年に佐賀医科大学を卒業後、広島大学原爆放射能医学研究所外科に入局し、消化管腫瘍外科の研修医となり、がん患者さんと4年間を過ごしました。とくに研修一年目は受持ち患者さんの死亡率は20%で、みんながん転移により亡くなりました。転移が患者の命を奪うさまを間近にして、それが現在に続く研究のモチベーションになっていると思います。

研修後、田原榮一教授の広島大学第一病理で大学院生としてがんの基礎研究をさせていただきました。時勢は、ちょうど癌遺伝子から癌抑制遺伝子にトピックスが移りつつある時代でした。田原先生からはよく「運・鈍・根が研究には必要だ」と言われ、取り敢えず鈍と根で頑張っていました。安井弥教授には、安井先生が講師の頃から実験も病理診断も手取り足取りで教えていただき、2000年に田原先生の後に教授になられてからは、今に続く転移研究の後押しをしていただきました。

1995年、日本がん転移学会に初めて参加しそこでFidler教授に出会いました。Fidler教授の講演は自身の1970年代のNatureに発表したデータから、癌転移の何たるかを説き起こし、up to dateに至るといふ揺るぎない命題に基づいた研究の印象を与えるもので、驚きました。翌年からヒューストンのMD Anderson Cancer CenterのFidler教授のラボに留学しました。そこで動物実験を中心とした転移研究を学び、その面白さに捉えられてしまいました。よく知られているように、Fidler教授は惹句の名手で、「転移は十種競技のチャンピオンだ」、「個々の癌細胞の顔が見えないと転移する癌細胞は見つけられない」、「10年以上も存続し続ける癌というものは、臓器に相当する」などのフレーズを耳にしながら、in situ hybridization法で高転移能を持つminor populationの癌細胞を病理組織上で同定する仕事を行なっていました。今にして思えば、EMTやstem levelのcancer-stromal interactionを微小環境レベルで検討することにつながっていたと言えますが、Fidler教授の提唱する概念のその向こうに隠されている転移のメカニズムを当時見抜くことは出来ませんでした。

Fidler教授の研究のもうひとつの特徴は、EGFRのような誰もが知っている「千両役者」を主演にして、初めて目にするようなストーリーを作り上げることでしょう。それまでの自分の研究は新人発掘に傾いていたのですが、新人を売り出すのはなかなか難しい。大スターを動かすのもたいへんな骨折りが必要ですが、Fidler教授は巧みなストーリー展開を周到に計画して成功をものされていると思いました。

私は、いま、Warburg effectと言う杉村春子ばりの老大女優をキャスティングして仕事をしようとしているのですが、大女優を納得させる新しい巧みなストーリーには未だにたどり着けていません。脇を固めるTCAサイクルや解糖系も渋い口調で私が学生時代に生化学の勉強不足だった

ことを語って来ます。それでも、「大女優戦略」に興味を持ってくれる若い人たちの助けを得てひとつひとつ仕事を進めています。鈍・根の上に「運」が舞い下りてくれるのでしょうか。

寄稿3：私のがん研究、がん転移研究

西岡 安彦 新理事（徳島大学大学院医歯薬学研究部）

私は昭和63年（1988年）に徳島大学医学部医学科を卒業し、当時小倉 剛教授が主宰する母校の第三内科（現在の呼吸器・膠原病内科）に入局しました。第三内科は初代教授 螺良英郎先生が掲げた「宿主からみた生体防御」を大きなテーマに、呼吸器疾患を中心に臨床研究・基礎研究を行っていました。当時私は「がん研究」に興味を持っていたため、曾根三郎前教授を中心とするがん免疫グループに所属し、大学院生として研究活動を始めることになりました。がん免疫研究の大きな魅力の一つは、基礎研究を医師自らの手で患者さんへ応用できる点にあります。入局当時に目にしたがん性胸膜炎に対する免疫療法がきっかけで患者さんの治療に応用できるがん免疫療法を開発したいという漠然とした夢を持つようになりました。1980年代はサイトカインの時代で、がん免疫の分野でも抗腫瘍エフェクター細胞のがん細胞傷害活性を増強するサイトカイン探しの時代でもありました。私も、マウスでマクロファージの活性を増強すると報告されていたIL-4のヒトマクロファージへの作用を検討するところから実験を始めました。しかしヒトIL-4はマクロファージの抗腫瘍活性を強力に抑制しました。予想に反した結果でしたが、腫瘍免疫抑制メカニズムとして報告し、学位研究になりました。最近の免疫チェックポイント阻害薬による華々しい臨床効果を見ると、いかに担がん状態の免疫抑制を解除するかは非常に重要な視点であったと気付くのですが、当時は抗腫瘍活性を増強する方法の探索ばかりに目が向いていてそれ以上のアプローチには繋がらなかったのは、今思うと少し残念に思っています。

一方でがん免疫のエフェクター細胞として考えた場合、マクロファージはがん細胞を積極的に認識して傷害しているとは考えにくく、そういった観点から細胞傷害性T細胞（CTL）の抗腫瘍効果に興味を持つようになりました。そして、CTL活性増強のための抗原提示細胞としてマクロファージ系細胞を捉え、抗原提示の修飾を考えるようになりました。ちょうどその頃、小倉教授が徳島で開催した日本バイオセラピー学会に、樹状細胞研究のメッカであるピッツバーグ大学からMichael T Lotze教授が招待され、その縁もあってピッツバーグ大学に留学することになりました。留学したピッツバーグ大学のHuman Gene Therapy Centerでは、Michael T Lotze教授の下、田原秀晃准教授（現東大医科研教授）が中心に樹状細胞療法と遺伝子治療の基礎・臨床研究（試験）を進めていました。私は、田原研でIL-12の遺伝子を導入した樹状細胞を作製し、抗腫瘍活性の増強した免疫療法を開発するというプロジェクトに携わることになり、何とか樹状細胞への遺伝子操作法を開発し、高い抗腫瘍効果をマウスのモデルで証明することができました。また、米国留学中に新しい治療法を開発を目指して臨床試験に取り組む臨床医の姿を見て、臨床の場で「トランスレーショナルリサーチ」に取り組むというスタイルが、自分の目指す研究スタイルであると感じるようになりました。帰国後は樹状細胞を使った肺がんに対する臨床試験を計画、実行しました。臨床研究、特に治療研究は結果がnegativeだと途端にその先が厳しくなるという現実がありますが、臨床研究の難しさも経験することができ、この頃から少し大きな視野で研究を考えることができるようになったと思います。

実はこの頃までの私の研究は、がん転移研究という言葉とはあまり縁がないがん免疫研究でしたが、2008年の米国MDアンダーソンがんセンターのFidler教授の下への短期留学、2011年の母教室への教授就任に伴い、がん転移研究を始めることになりました。最近の肺がん治療の進歩は著しく、非小細胞肺がんではドライバー遺伝子の発見による分子標的治療薬や前述の免疫チェックポイント阻害薬によるがん免疫療法が開発が相次いでいます。しかし、肺がんの約15%を占める小細胞肺がんに対する治療は、30年前とほとんど変わっていません。使用できる抗がん剤も2～

3剤であり、予後不良の肺がんです。しかし本来は抗がん剤や放射線治療に感受性が高い腫瘍です。そのため小細胞肺がんの患者さんの臨床経過をよく見ていると、ある一定の割合で原発巣（つまり肺病変）は化学放射線治療でよくコントロールされているにもかかわらず、肝転移巣の増大によりお亡くなりになられる患者さんがいることに気がきました。そこで、SCIDマウスを用いた肺がん多臓器転移モデルで検討したところ、偶然も重なって肝転移に関連する分子を同定することができました。現在、この分子の解析を中心に肝転移に対する治療薬の開発を目指して転移研究を進めています。私のがん研究暦の後半になって始まったがん転移研究ですが、現在大変興味を持って研究を進めているところです。研究を始めた当時に漠然とした夢であったがん治療薬（法）の開発という誰もが持つ夢に向かってまた新たな挑戦ができることを嬉しく思っています。我々の研究が少しでもがん転移学会の発展に貢献できるよう徳島大学呼吸器・膠原病内科として頑張っていきたいと思っています。よろしくお願いたします。

寄稿 4 : JAMR事務局幹事18年の思い出

伊藤 和幸 前事務局幹事（野崎徳洲会病院）

この度、18年ほど勤めた日本がん転移学会(JAMR)事務局幹事を井上正宏Drに引き継いだ。思い起こせば、1999年にJAMR設立以来8年程事務局幹事を務められた初代の宝来成功労会員が東京へ移動され、当時明渡均Drと入村第8回会長より指名されてから、あつという間の18年だったような気がする。引き継いだ際、最も重要視されたのはbalanceと言うことで、基礎、臨床、製薬の会員の方々と仲良くすること、地域性にも配慮してという事で、その後学術集会（会長）は、東京（入村Dr）-大阪（宮坂Dr）-徳島（曾根Dr）-東京（清木Dr）-金沢（磨伊Dr）-東京（横田Dr）-大阪（門田Dr）-徳島（曾根Dr）-富山（済木Dr）-鹿児島（愛甲Dr）-旭川（高後Dr）-金沢（佐藤Dr）-浜松（今野Dr）-広島（安井Dr）-松本（谷口Dr）-金沢（太田Dr）-大阪（伊藤）-米子（清水Dr）そして今年は大阪（土岐Dr）と全国を行脚する事に。学術集会では、会長が土地の名産やまた懇親会で大いに盛り上がり、repeatersの研究者が多いのも良き思い出である。

事務局幹事としての思い出は、宮坂会長の時に、それまでの研究会から学会へ名称変更した事、自由闊達な討論の雰囲気損なわれないかと、反対意見も多かったが、会則や規定、定款を作成し、無事学会へ移行できた。専門医制度とも全く無関係で、会長も外科、内科、基礎と回りながら、純粋にがん転移に関する議論を真摯にする会が四半世紀も継続したのは、（そしてこれからも続けていけるのは）、ひとえに会員の皆様方のpassionのおかげと感謝。

もう一点、思い出といえば、国際転移学会（MRS）の理事（Board members）を、中島元夫Drより引き継ぎ、昨年まで（加藤靖正Drへ引き継ぎ）8年させて貰った事。日本では曾根DrがJAMR-MRS合同会議を2006年徳島で開催されたが、その後もMRSは2年毎に、バンクーバー、フィラデルフィア、ブリスベン、ハイデルベルグ、成都と回り、JAMRより参加の会員と良い思い出を作ることが出来た。MRSは多国間で、早朝のSkype meetingと会員数が200にも満たないことが常にneck。ブリスベンの会議でJ. Fidler JAMR名誉会員がJAMRの様に臨床医と基礎研究者がうまくbalanceとってやるようにと、初めてお褒め頂いたのが忘れられない。2012年Brisbaneは30名以上のJAMR会員参加。

第22回日本がん転移学会研究奨励賞募集

<http://jamr.umin.ac.jp/research/index.html>

本賞はすぐれた研究業績を発表した本学会会員若干名に対して、
選考の上、本学会学術集会において授与する

【募集期間】

平成29年4月1日～9月30日

- ・受賞候補業績の範囲は、原則として本学会において発表された業績として、
本会会員により応募されたものとする。
- ・受賞候補業績は、将来の発展が期待される若手研究者(応募年度の4月1日現在
43歳以下)によるものとする。
- ・研究奨励賞受賞者数は単年度2名程度を原則とする。
- ・研究奨励賞の賞金(奨励研究費)は1件20万円とする。

募集要項・申請書等については、事務局までメール・Faxでお問い合わせください

◆事務局◆ E-mail: office-jamr@umin.ac.jp Tel/Fax 06-6945-0355

研究奨励賞受賞者一覧

	受賞者	所属
第1回	藤田 直也	東京大学分子細胞生物学研究所
	磯合 敦	旭硝子株式会社中央研究所
第2回	吉村 雅史	大阪大学医学部第三内科
	矢野 聖二	徳島大学医学部第三内科
第3回	伊藤 和幸	大阪府立成人病センター研究所
第4回	越川 直彦	スクリプス研究所/横浜市立大学
第5回	吉治 仁志	奈良県立医科大学第三内科
	軒原 浩	国立がんセンター中央病院内科
第6回	山本 博幸	札幌医科大学医学部内科学第一講座
	伊藤 彰彦	大阪大学大学院医学系研究科病理病態学
第7回	李 千萬	大阪大学大学院医学系研究科臓器制御外科
	板野 直樹	愛知医科大学分子医科学研究所
第8回	三森 功士	九州大学生体防衛医学研究所腫瘍外科
	隈元 謙介	福島県立医科大学第二外科
第9回	滝野 隆久	金沢大学がん研究所細胞機能統括
	狛 雄一朗	神戸大学大学院医学系研究科生体情報医学講座
第10回	菅原 一樹	大阪大学大学院医学系研究科
	川田 学	(財)微生物化学研究会微生物化学研究センター
第11回	加藤 幸成	産業技術総合研究所 糖鎖医工学研究センター
第12回	下田 将之	慶應義塾大学医学部病理学教室
	小泉 桂一	富山大学和漢医薬学総合研究所病態生化学
第13回	渡邊 リラ	第一三共株式会社
第14回	王 偉	金沢大学がん研究所腫瘍内科
	山本 真義	浜松医科大学第2外科
第15回	清水 史郎	慶應義塾大学 理工学部
第16回	早川 芳弘	東京大学大学院薬学系研究科 生体異物学教室
	福島 剛	宮崎大学医学部 病理学講座腫瘍・再生病態学分野
第17回	山口 英樹	国立がんセンター研究所 転移浸潤シグナル研究分野
	由井 理洋	Department of Surgery, UCSF
第18回	園下 将大	京都大学大学院医学研究科 遺伝薬理学
	谷口 博昭	東京大学医科学研究所 抗体ワクチン治療研究部門
第19回	泉 浩二	金沢大学 泌尿器科
	坂本 毅治	東京大学医科学研究所 人癌病因遺伝子分野
第20回	星野 大輔	神奈川県立がんセンター臨床研究所 がん生物学部
第21回	後東 久嗣	徳島大学大学院医歯薬学研究部 呼吸器・膠原病内科学分野

日本がん転移学会会則

第1章 会の名称

第1条 本会を「日本がん転移学会」“The Japanese Association for Metastasis Research”と称する。

第2章 目的および事業

第2条 本会は、がん転移による死亡率を減少せしめるべく、基礎、臨床、開発（薬剤、機器等）研究を通じて実質的討議を行い、がん転移研究の発展、診断・治療の進歩普及に貢献する事を目的とする。

第3条 本会は、前条の目的達成のため、次の事業を行う。

- (1) 学術集会を少なくとも年に1回開催
- (2) がん転移に関する研究発表、情報交換、資料の収集、教育及び研修
- (3) 本分野に関して海外研究者との連携
- (4) その他本会の目的達成に必要な事業

第4条 本会の事務局は、大阪市中央区大手前3丁目1番69号、大阪国際がんセンター・研究所内に置く。

第3章 会員

第5条 会員は、本会の趣旨に賛同し、評議員、顧問あるいは名誉会員の推薦を受け、理事会の承認を得て入会した個人ならびに法人（法人格のない団体を含む）とする。

第6条 会員である法人の取扱いは次による。

1. 法人に所属する個人はその法人の承認を得れば本会の事業に参加できる。
2. 前項により参加する個人からは年会費を徴収しない。
3. 会員である法人は登録者3名迄と会計事務担当者1名（兼任も可）を決め事務局に届出なければならない。

第7条 会員は評議員会において別に定める会費を納入しなければならない。

第8条 引きつづき2年以上会費を滞納したものは評議員会の議により、その資格を喪失する。

第9条 顧問は理事会にて推薦、評議員会にて承認を受ける。また、本会に対して特に功労のあった者は、名誉会員・功労会員として理事会にて推薦、評議員会にて承認を受ける。顧問・名誉会員・功労会員は本会の発展のために適切な助言をする。顧問・名誉会員・功労会員は会費を要しない。

第4章 役員および役員会

第10条 本会に会長1名、副会長1名、若干名の理事ならびに評議員、監事2名、事務局幹事1名を置く。

＊事務局幹事は会長が任命し、会長及び理事会の事務を補佐する。

第11条 会長は本会を統括し、理事会・評議員会では議長となる。副会長は、次期会長がこれを務め、会長を補佐し会長に事故のある場合はその職務を代行する。会長・副会長の任期は1年とする。

第12条 理事は評議員会にて、評議員の中から選任される。任期は3年とし、任期終了後1年間は再選されない。理事は会長を補佐し日常の会務について決定し、執行する。理事会の構成は、会長・副会長・理事および前会長とする。理事会は構成員の2/3以上の出席（但し委任状を提出した人は出席とみなす）により成立し、議決は出席者の過半数をもって決する。

第13条 評議員は会員の中から選出される。評議員の任期は3年とし、再任は妨げない。評議員会は会の運営に関する重要事項を審議決定する。評議員会は評議員の1/2以上の出席（但し委任状を提出した人は出席とみなす）をもって成立し、議決は出席者の過半数をもって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。

第14条 監事は評議員の中から選出される。監事の任期は1年とし、再任は妨げない。監事は本会の会計および会務を監査し、理事会・評議員会にて報告する。

第15条 次期会長・理事・評議員・監事の選出は日本がん転移学会役員選任規程に基づく。

第5章 総会および学術集会

第16条 総会は毎年1回学術集会の時期に会長が招集し、総会の議長となって次の議事を行う。

1. 会務の報告
2. 会長が必要と認める事項

総会の議事は出席者の過半数によって決する。可否同数のときは議長の決するところによる。

第17条 会長が必要と認めたときは評議員会の議を経て、臨時総会を随時開催することができる。臨時総会の議案は定期総会に準ずるものとする。

第18条 学術集会は毎年1回会長が主宰し、研究発表、意見交換を行う。

第19条 本会会則第2章第3条の4の規定に基づき各種の委員会を設けることができる。委員会の設置、その構成及び運営方法は、理事会において討議し、評議委員会にて承認する。また会の目的を達成するための具体的、実質的討議を行うため、研究推進会議(班)を設置することができる。その構成及び運営方法は理事会において討議し、評議委員会にて承認する。研究推進活動の経過については、学術集会で報告する。

第6章 会計

第20条 本会の経費は会員が拠出する会費ならびに協賛金等をもってこれにあてる。

第21条 毎年度収支決算は会長が作成し、監事の監査を受け、評議委員会の承認を得て、毎年総会において報告する。

第22条 会計年度は毎年1月1日に始まり12月31日に終わる。

第7章 会則の変更

第23条 本会会則の変更は理事会、評議委員会および総会において、各々出席構成員の2/3以上の承認を得なければならない。

付則

本会則は平成12年7月1日よりこれを実施する。本会則は平成14年6月8日一部改正した。本会則は平成18年9月3日一部改正した。本会則は平成29年3月25日大阪府立成人病センターの移転及び名称変更に伴い第2章4条を変更する。

日本がん転移学会役員選任規程

第1章 役員を選任

第1条 会則第15条により次期会長(副会長)・理事・評議員および監事は本規定に基づき選出される。なお、役員は65歳をもって定年とする。

第2章 次期会長(副会長)の選出方法

第2条 次期会長の選出に際しては、評議員全員に告示する。候補者は所定の様式で抱負を述べた資料を理事会に提出し、理事会はこれを討議し候補者1名を推薦する。

第3条 次期会長の選出は評議員会で行う。

第3章 理事の定数と選出方法

第4条 理事の定数は個人評議員より約6名(原則として基礎3名、臨床3名)、法人評議員より約2名とする。

第5条 理事は会則第12条により評議員の中から選出される。

第6条 個人会員理事は評議員の選挙により選出される。候補者は所定の様式で抱負を述べた資料を評議員会に提出する。

第7条 法人会員理事は理事の選挙により選出される。

第4章 評議員の選出方法

第8条 評議員は会則第13条により会員の中から選出される。

第9条 評議員の選出は理事会で行う。

第10条 個人評議員は、一定の条件(細則に定める)を満たす者とする。

第11条 個人評議員の候補者は所定の様式による資料を本会事務局に届け出ること。

第12条 法人会員評議員は理事会で選出する。

第5章 監事の選出方法

第13条 監事は会則第14条により評議員の中から選出される。

第14条 監事の選出は理事会で行う。

付則 1. 理事選挙の施行は次期評議員が選出された(平成15年度)以降とする。

2. 本役員選任規程は平成14年6月8日よりこれを実施する。本役員選任規程は平成15年6月29日一部改正。

3. 本規程の変更は理事会および評議委員会において、各々出席構成員の2/3以上の承認を得なければならない。

4. 役員任期は、65歳になる年の12月末で終了する。

日本がん転移学会役員選任規程細則

1. 個人会員理事の選出方法

1) 投票は原則として郵送とする。

2) 評議員は基礎系候補・臨床系候補に各1票投票する。

2. 個人評議員の選出条件

1) 原則として3年以上本会会員であり、会費を完納していること。

2) 本会や関連学会、学術雑誌などですぐれた評価を受けていること。

3. 評議員の資格

1) 3年連続して評議員会を欠席した者はその資格を喪失する。

日本がん転移学会 顧問・名誉会員

顧問： ^(故) 菅野 晴夫	杉村 隆	^(故) 明渡 均	
名誉会員：愛甲 孝	入村 達郎	小林 博	^(故) 佐藤 春郎
^(故) 末舛 恵一	清木 元治	高後 裕	曾根 三郎
^(故) 田中 健蔵	田原 榮一	^(故) 塚越 茂	^(故) 鶴尾 隆
新津 洋司郎	^(故) 螺良 英郎	^(故) 中村 久也	^(故) 磨伊 正義
宮坂 昌之	門田 守人	渡辺 寛	Isaiah J. Fidler
功劳会員：東 市郎	^(故) 阿部 薫	^(故) 尾形 悦郎	岡田 保典
小野 真弓	垣添 忠生	神奈木 怜児	北島 政樹
^(故) 久保田 哲朗	久保田 俊一郎	桑野 信彦	佐治 重豊
清水 暁	高橋 俊雄	竜田 正晴	田中 紀子
寺田 雅昭	豊島久真男	中津川重一	^(故) 馬場 正三
宝来 威	細川 真澄男	宮城 妙子	宮崎 香
武藤 徹一郎			

日本がん転移学会役員

会長：土岐 祐一郎 (26回)			
副会長：越川 直彦			
前会長：清水 英治			
理事：川田 学	越川 直彦	国安 弘基	土岐 祐一郎
夏越 祥次	西岡 安彦	エーザイ (株)	日本化薬(株)
監事：二口 充	大鵬薬品工業(株)		
評議員：足立 靖	石井 秀始	板野 直樹	稻田 全規
猪原 秀典	伊藤 和幸	伊藤 壽記	伊東 文生
井上 正宏	植田 政嗣	上原 久典	海野 倫明
大上 直秀	大島 正伸	太田 哲生	岡田 太
沖 英次	奥野 清隆	尾崎 充彦	片岡 寛章
加藤 淳二	加藤 靖正	加藤 幸成	神田 光郎
北川 透	北川 雄光	北台 靖彦	隈元 謙介
小泉 桂一	小林 浩	今野 弘之	堺 隆一
坂本 修一	坂本 毅治	佐々木 隆光	佐藤 博
澤田 鉄二	清水 史郎	滝野 隆久	竹田 和由
田中 稔之	谷口 博昭	茶山 一彰	中 紀文
永野 浩昭	中森 正二	中山 淳	馬場 秀夫
浜田 淳一	早川 芳弘	東 伸昭	樋田 京子
福島 剛	藤田 直也	藤原 俊義	藤原 義之
松浦 成昭	松尾 洋一	溝上 敦	三森 功士
向田 直史	望月 早月	森 正樹	八代 正和
安井 弥	安田 卓司	安本 和生	柳川 天志
矢野 聖二	矢野 雅彦	山本 浩文	山本 博幸
矢守 隆夫	由井 理洋	横崎 宏	横田 淳
横山 省三	吉治 仁志	渡邊 昌彦	
旭硝子(株)	協和発酵キリン(株)	第一三共(株)	中外製薬(株)
			(アイウエオ順)

事務局幹事：井上 正宏

(法人評議員については登録会員の中から各社より各1名選任される)
 評議員任期：平成27年7月25日～平成30年/第27回総会まで
 (第25-27回)

日本がん転移学会事務局 宛
Fax : 06-6945-0355

日本がん転移学会連絡用紙

日本がん転移学会会員の種々の変更・退会等の連絡はこの用紙をご利用ください。
会員番号(郵便物の宛名ラベルに印刷してある貴氏名の右下の数字)、並びにご氏名(フリガナ)を明記の上、
変更したい事項をご記入いただき、封書またはFax、E-mailにてご連絡ください。

年 月 日

住所等変更 ・ 退会 届

(上記、どちらかを○で囲んでください)

(フリガナ)	会員番号
氏 名	生年月日
勤	勤務先名称(部所属も記入してください)
務	〒
先	Tel
	Fax
	E-mail
自	〒
宅	Tel
	Fax
	E-mail
雑誌等送付先を○で囲んでください。 勤務先 ・ 自宅	
変更年月日	201 年 月 日 付で変更します
退 会 届	201 年 月 日 付でもって退会します
その他	

※個人情報について

会員への連絡、会誌等の発送等、学会活動の目的に限定して利用します。

=====
[発行・編集]
日本がん転移学会事務局
Tel/Fax 06-6945-0355 (直通)
E-mail: office-jamr@umin.ac.jp
〒541-8567
大阪府中央区大手前3丁目1番69号
大阪国際がんセンター・研究所内
=====

2017.6